

2018年5月6日 川越教会

神の愛の契り

丸山 勉

[聖書] コリントの信徒への手紙一 11章23節～34節

わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すこととなります。だれでも、自分をよく確かめたうえで、そのパンを食べ、その杯から飲むべきです。主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです。そのため、あなたがたの間に弱い者や病人がたくさんおり、多くの者が死んだのです。わたしたちは、自分をわきまえていれば、裁かれはしません。裁かれるとすれば、それは、わたしたちが世と共に罪に定められることがないようにするための、主の懲らしめなのです。わたしの兄弟たち、こういうわけですから、食事のために集まるときには、互いに待ち合わせなさい。空腹の人は、家で食事を済ませなさい。裁かれるために集まる、というようなことにならないために。その他のことについては、わたしがそちらに行ったときに決めましょう。

[序]教会とは、エクレシヤ(交わり)

「教会」という所はつくづく不思議なところだな、と思うことがあります。例えば教会は、会社のような事業体ではありません。お金儲けのような目的で教会は立っていません。そして、とても自発的な集まりです。義務教育のような教育機関でもありませんから、行きたいと思った人が行きますし、地域の制約も年齢の制限もありません。性別も関係ありません。そして、何年か過ごせば卒業する、という所でもありません。天に召されるまで居てよいところです。

お互いの趣味も育ちも全く異なる私たち一人ひとりが、今日も教会へと集められています。その私たち一人ひとりを結び付けているものは、ただ一つしかありません。それは、神様の愛です。私たちは、この神様の愛の中に本当の安らぎを得、その神様を賛美する者として教会に集められています。

ですから、もし教会が神様の愛を見失うことになってしまったのなら、教会は教会ではなくなってしまうかもしれません。もともと「教会」という言葉は、建物を意味するのではなく、「エクレシヤ」という「交わり」を意味する言葉のようです。「交わり」の本質と言うのは目には見えませ

んよね。お互いとお互いの「間」にあるものこそが大事なのだと思います。

[1] コリント教会の交わりにおける問題

新約聖書の「コリントの信徒への手紙一」を読み進めていますけれども、今日はもう 11 章です。ここでも、神様の愛を見失った所から生じた問題を使徒パウロは追及しています。それは、まだ紀元 50 年代に出来た、多種多様な人々から成るギリシアの地の教会—コリント教会—における、一見小さく見えるけれども、根が深い問題です。それは集まる時の**食事に絡む問題**でした。

この教会を生み出したと言ってよいパウロは(執筆当時はこのコリントを離れていたのですが)、33 節で極めて実地的な勧めを語っています。「わたしの兄弟たち、こういうわけですから、**食事のために集まる時には、互いに待ち合わせなさい。空腹の人は、家で食事を済ませなさい。**」

ちょっとビックリしないでしょうか？あまりに単純なことです。食べることで不公平や不満が生まれないうために、会食をする際は**まず待ち合わせを**しなさい、と言っているのです。それが出来ないほどに交わりが壊れてしまっていたのです。何故でしょうか？その当時の事情とも関係があったようです。

そもそもキリスト者たちの群れ(エクレシア)は、イエス様が十字架にお架かりになり、甦られ、そして天に昇られたその直後から、**共に食すること、パンを裂くこと**を、**信仰共同体の証しとして大切**にしてきました。(使徒言行録 2:42、46)。けれども、その後に来たここ外国の地、コリントの教会では、会員各自が晚餐を持ち寄り、富める者は貧しき者に分与して会食し、その中で、イエス様がなされた最後の晚餐を記念する「**パンと杯**」とに与ったことのようなようです。今の時代と違って、いわゆる愛餐会と主の晚餐式とは結びついていたようです。

ところがこの時のコリント教会では、集まる者たちの「**格差**」ないし「**差別**」の問題が横たわっていました。時間的にも余裕のある富める者が先に食べ、或いは葡萄酒で酔っ払っていて、遅くまで働かざるを得ない後から来た貧しい者たち(奴隷たち)は粗食に甘んじるか、食がなく飢えているような有様であったようです(11:21 参照)。ですからパウロはハッキリ言うのですね。「それでは一緒に集まっていますが、**主の晚餐を食べることにはならないのです**」(11:20)と。

単純に考えても、誰か他者と共に食事をする時、もし一方が豪華な食事をし、目の前のもう一人の人がその余りものを食する、ということがあれば、それはとんでもないことでしょう。いくら口先で「愛」を語っていても、**何と虚しいことか**、ということになります。そのようなことがキリストの教会で現実になっていたということにパウロは黙ってはいただけませんでした。

[2] 最初の「主の晩餐」を思い起こせ

そこで 11 章 23 節以下にパウロがそこで語ったことに注目です。ここで捉えたいことは、パウロは、自分自身の思想や考え方を述べるのでも、単に「丸く収めなさい」と言うのでもなく、自分も「主から受けた」ことだけを語ったのです。ただそれだけを語ればよいと思ったのではないのでしょうか。つまり、あの**最初の主の晩餐**—つまり、主イエスの十字架前夜の、弟子たちと共にした**最後の晩餐**—におけるイエス様の言葉と振る舞いをコリント教会の人々に思い起こさせたのです。

すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。(11:23~25)

これは、よくよく味わうと、大変不思議な晩餐の式だと言わざるを得ません。パウロがここで書きとどめてくれた「主の晩餐」の制定の言葉については、主イエスのご生涯を綴った福音書のいずれにも、多少表現は違いますが記されています。

イエス様はこの食事を、旧約聖書に記されている「**過越の祭り**」と結びつけて考えておられました。ルカによる福音書 22 章では、「**過越の小羊を屠る徐酵祭の日が来た**」、そして弟子に「**過越の食事が出来るように準備をなさい**」と言います。急に言われて少し戸惑った弟子たちにイエス様は「都に入れば水がめを持った男に会うから、その人が入る家までついて行き、その家の主人に部屋のことを尋ねなさい。そうすると整った部屋を見せてくれるだろう」というようなことを言うのですね。不思議ですね、果たせるかな、その通りに事が運んでいくのです。

さらに不思議なことは、この食事が行われた時、イエス様はすぐこの後、弟子のユダがご自分を裏切り、銀貨で売り渡すことをご承知だったのです。ユダだけではありません。全ての弟子たちがやがてイエス様の許から逃げ出すこともご存知であったに違いありません。にも拘わらず、ルカ福音書 22:15 ではこのように記されています。

「**苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越しの食事をしたいとわたしは切に願っていた**」。

[3] 「私を食べよ、そして私の血に与りなさい」

もっと不思議なことがあります。異常なこと、と言っても良いのかもしれないことです。この食事のホストと言いますか、給仕役はイエス様自身ですよね。その食卓を提供する方が、『これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい』と言われ、また、「食事の後で、杯も同じようにして、『この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい』と言わ

れたのです。

何ということでしょうか！！給仕役であるお方が、「私を食べよ、そして私の血に与りなさい」とおっしゃっているのです！「過越の食事」では、あのエジプトの奴隷の家からの先祖の解放が、鴨居に塗られた犠牲の小羊の血に免じてなされたことを、それこそ記念して、小羊を屠ったのですが、今ここでは犠牲の小羊が、イエス様ご自身に代わっているのです！この食事において、神の子イエス様を殺す暗い罪が正に進行しようとしているその最中で、それを「赦す」ためにご自分が十字架で肉を裂き、血を流される、そのことによって、罪人である私たちの新しい出エジプトの出来事がなされるという「新しい契約」、「神様の新しい愛の契り」、「人間の完全な救いの実現」がここで記されているのです！

そして私は思いました。これは変な比喩かも知れませんが、日本にも古来から「血による契約」という形の契りがあると思うのです。一致団結して大きな戦いに赴く際に、自分の指先の血を拇印にして契約をする、「血判書」というのがありましたよね。有名な所では、所謂「忠臣蔵」の物語です。浅野内匠頭の仇討ちをするために、大石内蔵助に従う赤穂浪士たちがやはり次々に自分の血を約束の印としました。それと、この主イエス様の血による契約とは正反対ではないでしょうか。

忠臣蔵では、赤穂浪士たちが「血」をもって忠誠を誓い、戦いに出ていくわけですが、この晚餐式で忠誠を誓い、戦いに出ていくのは、弟子たちではないのです！神のひとり子、主イエス・キリストが、私たち罪人のために、私たちに代わって神に裁かれる十字架の戦いを心にお定めになられたのです。それはその直後の、ゲツセマネの祈りにおいて確定されました。「父よ、私の願いではなく、あなたのみこころのままに行ってください」と。

そうです、過越の食事である主の晚餐において、主イエス様は、ただ神様の御心の中に受け身となって「引き渡され」、しかし、能動的に自ら「屠られた小羊」となって死なれることを選び取られたのです。言ってみれば「あり得ない」ことが起こったのです。そのあり得なさとは、他に比べ得るものがない神様の愛の「あり得なさ」そのものです！そして、私たちは、この主の晚餐を受け取ることによって、証し人とされ、この人知を遥かに超えた大きな愛を——主の死を——世界に対して告げ知らせることになるのです。それこそが「記念として行いなさい」と言う意味だと思います。「記念」と言っても過去のことではないのです。また、傍観的なことでもないのです。正に「私の罪の解放の出来事」そのものです。あなたにそうように受け取ってもらいたい、そして、それは全ての人のための私の肉であり、また流される血なのだ、とイエス様はおっしゃっているのではないのでしょうか。

【4】「ふさわしくない」と言うのは傲慢

27 節で「ふさわしくないままで食べたり飲んだりする者は主の体と血に対して罪を犯すことになる」という言葉も、今語った文脈で理解すれば、「私はふさわしくない」と尻込みす

る言葉ではないと思うのです。この晩餐は、主ご自身の体と血、つまり存在全てがかかっている「招き」の食卓であると言うことです。主が成し遂げて下さったことにただただ感謝して受ければそれで十分です。「私はそれを受け取るには罪が大きすぎる」という人がいるとするならば、それはちょっと違います。それでは、主が弟子たちの足を洗われた時、「私の足など決して洗わないで下さい」と言ったペトロと同じになってしまいます。主イエス様はペトロに言われたではないですか。「私があなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と。

自分などととも神様に顔を向けられない、と罪を悔い改めている人をこそ、神様は招いておられるのです。大切なことは、私たちが神様の憐れみ、救いなど必要ないと突っぱねるほど傲慢になってはならないということです。神様の恵みは、主イエス・キリストのいのちという実に高価なものなのです！

[結]文字通り「兄弟」として

パウロは、このような交わりの不一致やどこかギスギスしているコリントの教会の一人ひとりに向かって、「わたしの兄弟たちよ」と呼びかけています(33 節)。これは大切な言葉だと思いました。他の箇所でもしばしばそのように呼びかけています。「兄弟たちよ！」。私はこれまでそれを何気なく、親しみを込めた呼びかけのように思っていたように思います。恥ずかしながら。けれども、特にこの主の晩餐のことが語られている所で、「兄弟よ」と言われているということはどういうことなのかを考えていた時に、「そうか！」と気付きました。

私たちは、皆、イエス様の血につながられているのですね！同じ血につながられているのですから、文字通り「兄弟」です。そういえば、パウロはこういう言葉を既にこのコリントの信徒への手紙一 8 章のところで語っていました。

「その兄弟のためにも、キリストが死んでくださったのです」と。(8:11)。

コリントの教会だけではありません。この地上にキリストの名による全ての群れが、真実に「主の体」であり続けるために心に刻みつけておかねばならないことはこの事実ではないでしょうか。——「その兄弟のためにも、キリストが死んでくださったのです」。——十字架は、私たちが仰ぐものであるだけでなく、私たちが根底から支えてくれるものなのです。

イエス様は、私たちの中に、そして、私たちの「間」に来てくださったお方です。「ことばは肉となり、わたしたちの間に宿られた」とヨハネ福音書の 1:14 にありますように、今、私たちの間には、十字架にかかり、復活したお方が生きておられる、このお方に支えられながら、神様の大きな愛をご一緒に証してまいりましょう。来週は伝道開始 50 周年の記念礼拝を持ちます。ただ、主に感謝です。

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、あなたの御名を賛美いたします。

あなたは「主の晩餐」という、この世が終わるまでずっと続けられる素晴らしい恵みの食卓を残してくださいました。それに与る私たちが、あなたの愛を受け、主イエス様の死を救いの出来事として告げ知らせるためにです。

どうか、この晩餐の中に込められている途方もないあなたの、私たち一人ひとりへの愛を、心を開き、心いっぱい受け止めることが出来ますように。

そして、このあなたの招きの中に、一人でもおおくの方々と共に与ることが出来ますように、私たち川越教会の伝道のわざをも祝し、私たちがあなたの器として用いて下さい。

救い主イエス・キリストの御名によってお捧げ致します。

アーメン。